31　東洋女子歯科医学専門学校校長・宇田尚（第3報）

永藤　欣久
東洋学園大学 東洋学園史料室

昨秋，遺族より宇田尚（槃山 1881～1968）の葬儀における財団法人斯文会（湯島聖堂）会長・徳川宗敬の弔辞を寄託された．これは槃澗学寮（東洋学園栃木寮）に残されていたものである．文中，徳川宗敬は宇田が宇野哲人，塩谷温（節山）とともに30年に亘り斯道の発展に努めたと述べ，その功の筆頭に湯島聖堂神農廟の建設，献納（1943年）を挙げている．塩谷温は徳富蘇峰と並び宇田の思想上の重要な友人であり，先代の塩谷時敏（青山）と宇田廉平（白里）以来，交誼は二代に亘る．

さて，宇田尚は日露戦役の軍功により北白川宮成久王に侍し，元郡上藩主・子爵青山幸宜の知遇を得た．日本耳鼻咽喉科学会創設者，東京慈恵会医科大学初代学長の金杉英五郎も加わり，指定認可に蹉跌した明華女子歯科医学専門学校の経営を宇田，青山，金杉らが引き受けたのが1926（大正15）年であった．

専門学校令（1903年）への対応に躓いた済生学舎以下，さらに文部大臣指定制を伴った1906年の医師法，歯科医師法で混乱した私立医学校の事例は多数に上り，明華女歯もその例に漏れなかった．歯科教育における後発校の指定問題について，主務官庁の文部省歯科医師試験附属病院長で後に東京高等歯科医学校（東京医科歯科大学）を設立する島峰徹は，私学経営者に対し施設，設備の改善と教授陣の強化を強く求め，財政的にできない者は退陣させ，次を引き受ける理事団を自ら探し求めたと，長尾優は記している（『島峯徹先生』）．

宇田ら新理事団は校名を東洋に改称し，財務体質の改善を図って歯科教育における女子校初の指定認可を得た（1926年11月4日）．

理事長は青山幸宜の子息で出羽国亀田藩主家の岩城隆徳，校長には前陸軍軍医学校長・軍医総監飯島茂を迎えた．飯島は1年に満たず1927年8月9日に退任，岩城が校長事務取扱を兼ねたが28年9月17日には岩城が辞意を表明し，同年12月8日に宇田が理事長，10日に青山が校長事務取扱に就任した．青山は29年8月22日付で校長に就任したが，翌30年2月6日に他界した．同年10月22日に宇田理事長の校長兼務が認可され，東洋女子歯科医専の経営，教学両面を掌握した．ここに至る経緯は計画的なものと偶然が相半ばしたと考えられる．かくして近現代の医学教育機関に特異な漢学者の校長が誕生した．

同年に宇田尚は槃澗書屋を槃澗学寮と改称して斯界の研究者に解放し，青年教育や思想犯転向教育を行い，1935年に斯文会理事，36年に東亜文化協議会理事，38年に北京臨時政府教育部最高顧問・国立北京師範学院副院長に就任した．北京臨時政府教育部総長の湯爾和は金沢医学専門学校，ベルリン大学を経て日本で医学博士号を取得した医学者である．

1941年に大政翼賛会参与，徳富蘇峰が設立した財団法人青山会館理事長となり，43年7月の神農廟遷座直後，翼賛会興亜総本部参与に就任した．

東洋女子歯科医専における宇田尚の教育姿勢は，以上から容易に推察される国家観に基づく国粋主義にあったが，陸軍皇道派の山下奉文と親交があり南進論，対米英開戦には反対の立場をとった．

1946年，公職追放となる（52年追放解除）．前後して脳出血を発症し，栃木で過ごす時間が長くなったが長命し，1968年3月7日に86歳で没した．子女が二人あり，長女の夫は航空機設計技師（東大工）であったが事故で殉職し，後添えは医師（東大医）で名古屋鉄道病院長などを務めた馬渡一得，次女の夫は外相，蔵相などを歴任した愛知揆一（東大法）である．両者は校長，学長として東洋女子歯科医専，東洋女子短期大学の経営を引き継いだ．